整備学校の入学者数回復

「増加」が「減少」11ポイント上回る

本紙調査

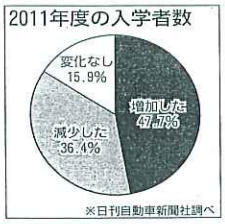
自動車整備学校の入学者数が回復してきた。日刊自動車新聞社が全国の整備学校を調査した結果、2011年度は昨年度より入学者数が増えた学校が多いことが明らかになった。エコカー補助金により高まった自動車業界への注目が、入学者数増加につながったと見られる。ディーラーなどの採用者数は減少幅が改善傾向を示しているが、求人を増加する企業は少なく、学校には魅力ある整備士育成が求められる。

魅力ある整備士育成を

全国の自動車整備学校を対象として3月下旬に調査を行い、45校から有効回答を得た。その結果、11年度入学者数が昨年より「増加した」と回答した学校が47・7%で、36・4%の「減少した」を11・3ポイント上回った。昨年はリーマンショックよる経済状況の悪化が自動車業界にも及び「学生や保護者などから不安の声が上がった」（メーカー系整備学校）ことで、入学者数が減少した学校も多くあった。その後、エコカー補助金による販売台数の増加など、注目が高まったことも入学者数が増えた要因と見られる。

同様にメカニックを採用する企業側も昨年は求人を絞る傾向が強かった。昨年の調査では求人が「減少した」との回答が67・5%と一昨年の39・1%から大幅に増加した。今年の調査では43・2%と改善が見られるものの、「増加した」は11・4%と低く、企業が今後の新車販売台数減少を懸念していることがわかる。

12年度は、東日本大震災が自動車業界に与えた大きな打撃により、整備学校でも学生確保や就職への影響は避けられないと予測される。4年制大学の就職率が伸び悩む中、国家資格の優位性や教育内容、次世代技術への対応など、整備学校は高校生や高校の進学担当者へのアプローチの手腕が問われている。



日車協連、被災組合員支援へ義援金

全国から募る

日本自動車車体整備協同組合連合会（日車協連、丸山憲一会長）は、東日本大震災で被災した組合員の支援を目的に全国の組合員から義援金を募る。また被災した組合員の従業員周旋を行うなど、被災組合員を支援する。

日車協連によると被害の大きかった岩手県で11社、宮城県で13社、福島県で16社が被災した。そのうち岩手県大船渡市で1人が死亡、2人が行方不明（うち1人は家族）と人的被害も発生した。確認中の組合員もあり、今後さらに被害拡大が予想されている。

今回の義援金は、特に被害が大きかった3県の被災組合員へ寄贈する予定で、専用口座を開設した。5月9日を期限とし、一口2千円以上で振り込みを呼びかける。

また被災組合員の従業員については、一部の組合員から受け入れ要請もあるという。このため、岩手、宮城、福島の事務局に働きかけ、他地域の組合員との調整に乗り出す。

異分野連携で新サービス網

スキャンツール媒介にエムログが構築を検討

スキャンツール（外部故障診断機）開発などを手がけるエムログ（大石哲司社長、東京都港区）は、自動車整備事業者と周辺事業者による連携ビジネスの検討に乗り出す。昨秋以降、同社の主力製品「イーグルキャッチ」の引き合いが、中古車事業者やガソリンスタンドなど整備事業者以外から増えていることに対応する。自動車の電子診断が一般化する中で、新たなサービス体制の構築を目指す。

イーグルキャッチは、通信モジュールを内蔵した故障コードのスキャンツール。測定結果が、同社サーバーを経由して携帯電話とパソコンに送られる仕組みだ。故障コードの読出しと消去の機能を持ち、測定結果や登録する顧客車両情報をサーバーに蓄積して、専用の管理画面で確認することも可能としている。

整備事業者の利用を前提として開発し、普及を進めているが、最新の情報を用いて簡単な操作で短時間で診断できるという手軽さから、中古車販売事業者が車両状態を証明したり、ガソリンスタンドがユーザーとのコミュニケーションツールとして導入するなど、他の分野での活用が進んでいる。

診断数の増大に伴い故障を発見する数も増加するとみられる。そのため、その後のサービス体制として整備事業者と連携したビジネスモデルの構築を検討している。

2010年度RS実績

JAFまとめ 高速道利用増や猛暑

3%増、260万件

日本自動車連盟（JAF、田中節夫会長）は2010年度（10年4月～11年3月）のロードサービス（RS）実施件数をまとめた。それによると前年同期比3・1%増の259万8244件の救援に当たった。RS対象各種を拡大したことや高速道

東北本部では17%増と大幅に増加

3月のRS実施状況

日本自動車連盟がまとめた3月のロードサービス（RS）実施状況は、総実施件数が前年同月比0・9%減の21万4850件となった。

3月11日に発生した東日本大震災の影響も大きかった。JAF特別支援隊を派遣した東北本部では前年同月比17%増と大幅に増加している。

出動理由をみると、「燃料切れ」が前年同月比21・8%増となった。震災後、JAFも一部の地域で給油の対応を停止せざるを得なくなるほど広域でガソリンの供給量が不足した。4月上旬までに解消したものの、実際の需要はさらに多かったと見られる。

このほか、前月に比べ「過放電バッテリー」の構成比が上昇。その一方で、冬場に多かった「落輪（落込含む）」が4位に後退している。

2010年度JAF地方本部別ロードサービス実施件数

地方本部	実施件数	前年度比
北海道	109,077	107.1%
東北	157,034	109.7%
関東	776,105	103.0%
中部	482,049	102.7%
関西	516,174	102.1%
中国	143,458	104.8%
四国	82,285	102.3%
九州	332,062	100.7%
合計	2,598,244	103.1%

HV&EV整備

iPad活用し配信

HV関連サービスマニュアル

エー・ティ・ティ（波多江圭助社長、大阪市北区）は、米アップル社のタブレット型携帯情報端末「iPad（アイ・パッド）」＝写真＝を活用し、HV（ハイブリッド車）やEV（電気自動車）関連の電子マニュアル配信を開始する。情報技術を用いて行う学習方法であるeラーニングもアイ・パッドやアンドロイドのタブレット端末に対応させる。今後、商品・サービス別マニュアルや動画を用いたメンテナンス方法などを追加する予定だ。

同社は2007年から、ウェブによるeラーニングを実施している。低圧電気取扱者研修や動画とともにメンテナンス方法を解説するなど、顧客である整備事業者のスタッフのスキル向上や新機構の習得などを支援してきた。合わせて、社内インストラクターの特別研修にも取り組み、人材教育の支援も展開する。

新車販売におけるHVの比率が高まり、自動車メーカーによるEV市場投入を背景に、エー・ティ・ティは、すでに展開するウェブに加えて、アイ・パッドやタブレット端末でのHV・EVに関連する低圧電気取扱者マニュアルやHVのサービスマニュアルの電子版など、サービスコンテンツの配信に注力する。これをはじめ、自動車整備の現場に適したシステムの構築や商品の提供を行う方針だ。

整備新世代

■3

般化したが、整備業界のなかでは最も早い部類ではないかと思う。

また、この4年前の75年に93年にオートザム店をオープンした。

大学卒業後、ディーラー勤務時代も含めて一貫して営業を引き継いだ時にもまったく違和感はなかった。

現在、年間車検台数は1300台程度で推移している。

当社の顧客の中にも、2年に1回しか会わない、などというケースもある。少なくとも1年に1回は会うための仕

隣の工場 お知恵拝借

■8

（月曜日に掲載）

もてなす

「フロントの装い」

工場のフロントは、お客さんにとってどのような場所であるべきでしょうか？

父が亡くなり、中部地方にある実家の整備工場を継ぐことになった川口公一さん。当時40歳と働きざかりの川口さんは、展示会などの運営会社に勤務していました。

社長になって、最初に気になったのは素っ気ない作りのフロントだったと言います。先代は大口の法人客を多く抱えており、個人客に目配りする雰囲気は当時の社内にありませんでした。

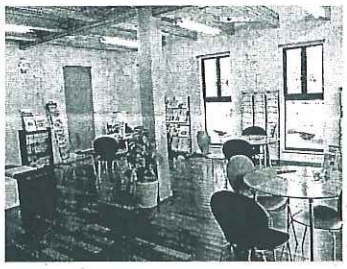
川口社長は「これはもったいない」と直感しました。前職では「人を集めるにはどうしたらいいか」「来場者に喜ばれる展示の仕方はどうあるべきか」などを常に考えていたこともあり、まずは〝お客を呼べるフロント〟作りを始めました。

これには理由もあります。主力の法人客は大口ユーザーということもあり、価格を安くせざるを得ません。今後の収益を考えるなら個人客の開拓が不可欠ですが、そのためにはまず、お客に認知され、足を運んでもらう工夫が大事だと考えたのです。

川口社長は、社員一人ひとりに個人客を集める重要性を説明しました。さらに法人客のうち、長い付き合いでも採算性の低いところは思い切って取引を打ち切りました。退路を断ち「個人客を開拓しなければ生き残れない」という考えを明確にしたのです。

当初は方針転換に戸惑っていた社員たちも、少しずつ知恵を出し合うようになりました。まずはフロントを綺麗に掃除し、ゆったり腰掛けられる椅子も買いました。週末には見よう見まねでイベントを開くなど、全員でアイデアを実行に移していきました。

その結果、狙いどおり来店客が増えただけでなく、車の販売も伸びました。〝集客のプロ〟から見れば100点満点とはいきませんが、川口社長は「人が集まる店は儲かるという意識が社内に浸透してきたことが最大の収穫」と満足そうです。（社名・人名等は仮名です）



この連載のバックナンバーは日刊自動車新聞電子版で見られます
http://www.netdenjd.com/

著者　宮﨑　聡子